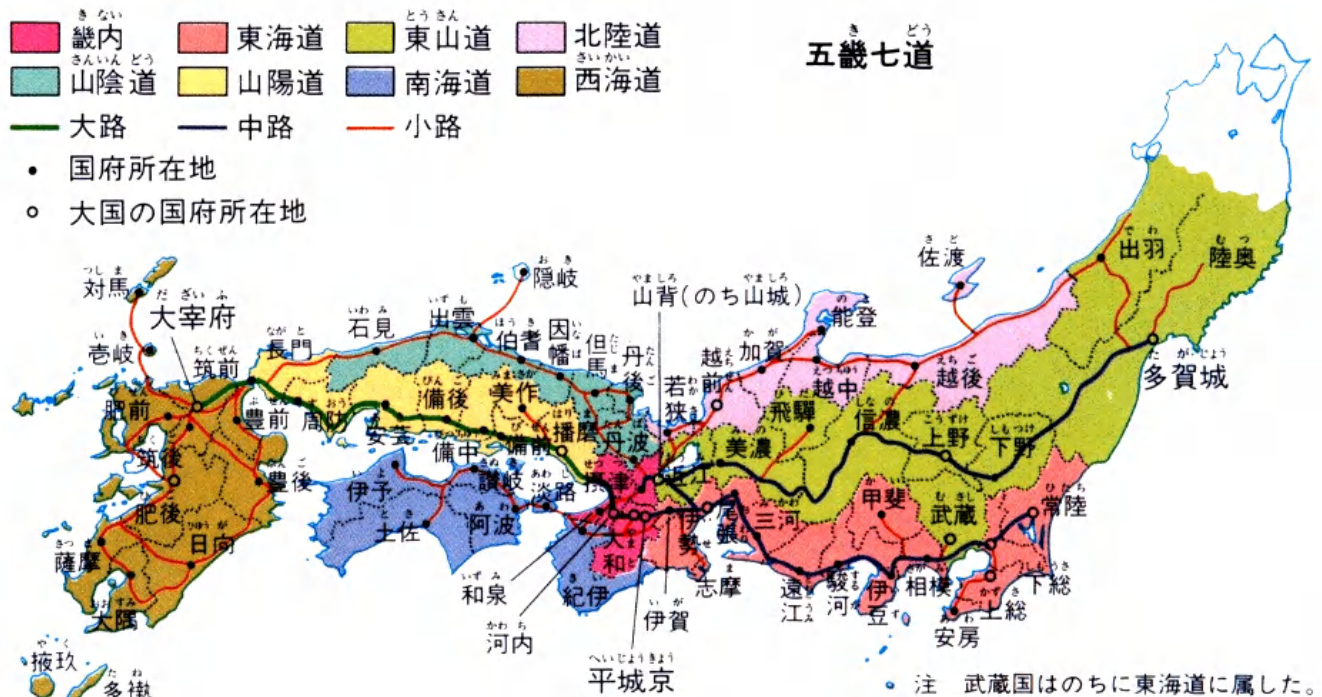


1. 東山道と坂本駅

東山道という言葉には、二つの意味があります。一つは五畿七道の一つで、本州内陸部を近江国から陸奥国に貫く広域地方行政区画、もう一つは同所を通る古代から中世にかけての幹線道路(行政区画と同名の官道)を指します。五畿とは畿内とも言い、京に近い国々(山城国、大和国、河内国、和泉国、摂津国)の令制五力国を指す呼称です。

ここでは道路としての東山道について述べます。



古代の朝廷は飛鳥時代から平安時代の前期にかけて、中央(都)と地方との連絡、人馬の移動、税物の輸送、それに何より現地の情報をいち早く知るという目的のため、官道を計画的に整備してきました。文化2年(646)「大化の改新」が發布された頃、中央集権の国づくりに必要な法律と、組織機構の基になった「大宝律令」が策定され、この支配体制を全国に及ぼすため、都から東海・東山・北陸・山陽・山陰・南海・西海の七つの道を結ぶ道を整備しました。延喜式には支線も含めて86駅あったと記されています。この官道は通行量などから大路・中路・小路に分けられ、原則として30里(約16キロ)ごとに駅(駅家)を置き、駅ごとに駅馬が常備されました。駅周辺には駅長や駅子を出す駅戸を置き、駅馬の育養にあたらせました。駅には往来する人馬の休息・宿泊施設を置き、駅鈴を持っている官人や公文書を伝達する駅使が到着すると、乗り継ぎの駅馬や案内の駅子を提供しました。

この地域を通っていた東山道は 中路で、当時まだ民情の不安定な東北地方への直結路として造られた政治的な大動脈でした。また、都から東へ行くには 海沿いに東海道があり、山の中を行くものに東山道がありました。当時は ^{たいが}大河に橋を架ける技術が発達しておらず、^{とか}渡河困難な大河が続く東海道よりも、東山道の方がむしろ安全と考えられていました。このため、東山道は 東海道の渡河方法が整備される10世紀頃までは活発に機能していました。

東山道の起点は、^{びわこ}琵琶湖の南端の ^{おうみのくに}近江国 ^{せ た}瀬多(瀬田)で、終点は宮城県 ^{たがじょう}多賀城まででしたが、のちにY字状に分かれます。一つは ^{むつのくに}陸奥国(岩手県)の ^{いさわ}胆沢から ^{しば}志波、もう一つは ^{でわのくに}出羽国(山形県・秋田県)の秋田城までと推定されています。



《 東山道の道筋 》

[東山道のルート]

国府・近江国(滋賀県)→美濃国(岐阜県南部)→飛騨国(岐阜県北部)→信濃国(長野県)・信濃国府→上野国(群馬県)→下野国(栃木県)→岩代国(福島県内陸)→磐城国(福島県沿岸)→陸前国(宮城県)・多賀城国府→出羽国(山形県・秋田県)・陸奥国(岩手県)

※京都・多賀城間の概算距離は 810km

[補足] 奈良時代当初は 東山道の枝道として、東山道武蔵路が設けられていましたが、宝亀2年(771) 武蔵国は 東海道に入れ替わり、武蔵路も東海道に組み込まれていきました。

当時の ^{えなのごおり}恵那郡には ^{おおいのうまや}大井駅と ^{さかもとのうまや}坂本駅があり、その先は 東山道最大の難所である ^{みさかとうげ}神坂峠を越えて ^{あちのうまや}阿智駅へと続き、当時の唐里で74里(約40km)の長丁場でした。このため、坂本駅・阿智駅の両駅には 特例として通常の2～3倍 ^{ひき}30足の駅馬が用意され、輸送にあたる駅子にも免税の恩典が与えられていました。神坂峠は 標高1595mの峠を越えていく難所であり、^{だじょうかん ふ}太政官符によると夜明け前に出発しても到着は夜遅く、一駅ながら数駅分の苦勞を要し、駅子の荷運びは過酷を極めました。冬には 道中で死者が大勢出たこと、そのため何度となく駅子の逃亡が発生したことが記されています。

み さか とうげ 神坂峠

神坂峠は文献上でも、「古事記」に日本武尊が東征の後「科野の坂の神をことむけ給いて尾張の国に還り来ましこ」をはじめとし、日本書紀、続日本書紀など多くの古典にその険しい峠の名をとどめています。

大正10年(1921) 神坂峠の頂上から、鳥居龍蔵が須恵器の破片を発見したことに始まり 昭和42年(1967)からの発掘調査で、径約4m・高さ0.7mの

石積遺構や古代に祭祀で使用された滑石で作った

鏡・刀子・剣・勾玉・白玉・棗玉・管玉などの石製

模造品、須恵器、土師器、灰釉陶器など多くの遺物が発掘され、昭和56年(1981)に国の古代祭祀史跡に指定されました。これらの遺物は 現在 阿智村の教育委員会(中央公民館)に保管・展示されています。

さか もと のうまや 坂本駅

坂本駅の場所は 諸説ありますが、現在の中津川市駒場付近が有力とされています。

東山道の駅制がなくなった時期の記録はありませんが、承平・天慶(931～946 年)の頃には地方政治が乱れ、財政の窮乏などと重なり、駅の維持が困難になったと言われています。

東山道はそれ以降も生活交流の主要路として使われ続け、この地域に東西の文化をもたらしました。

また、江戸時代に入ると、江戸を中心とする五街道

が整備され、東山道は中山道・日光例幣使街道・

奥州街道などに再編されました。

平成29年(2017)東山道の坂本駅が有ったと思わ 《坂本駅の場所と思われる箇所が発掘調査》

れるこの地域内で青木斧戸線道路新設事業が進められ、工事区域内において市の発掘調査が行なわれた結果、古墳時代～飛鳥時代(592～710) 住居跡6戸の遺構と土器類が発見されました。隣接する「大道上古墳」でも同様の遺構や土器類が発見されており、この時代に数多くの住居郡が有ったと考えられることから、坂本駅集落跡の証明になるかも知れません。



《 神坂峠の場所から 100m の箇所で発掘調査 》



《 坂本駅の場所と思われる箇所が発掘調査 》

2. 織田信長と阿寺城

戦国時代 天下統一を目指す尾張の織田信長は、甲斐の武田氏と対峙していました。

そうした中、東美濃は両軍の境界にある地で、岩村に本城を構える遠山氏の支城であった阿寺城もその最前線にありました。

その城は 手賀野の斧戸にあった山城で、築城時期は明らかではありませんが、鎌倉時代の武将 加藤景廉(遠山氏の先祖)が源 頼朝からこの地を拝領したのち、東山道を押さえるための要害として築城されたと言われています。また、遠山氏の勢力は恵那郡の全円及び木曾、土岐郡の一部に及んでいました。

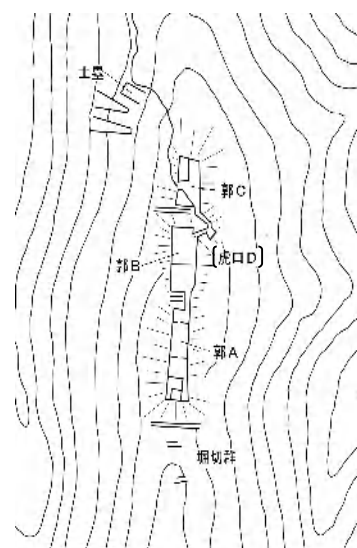
文治元年(1185) 鎌倉幕府の重臣であった加藤景廉が、幕府創設時の功績により、源 頼朝から拝領した荘園の一つが遠山荘でした。遠山氏は嫡男 景朝が遠山と改名、以降 遠山姓を名乗り岩村城を拠点として388年間続きました。

織田信長は 遠山氏の勢力を知り、武田方への前衛にしようと、その時の岩村城主 遠山景任(遠山氏最後の城主)に、叔母(女城主と言われている人)を嫁がせ、この景任が亡くなった後織田信長は 五男 御坊丸(後の織田勝長)を養子として送り込んでいます。

天正2年(1574)武田信玄の子 勝頼は、信玄の死後 勢いの衰えた武田勢を盛り返すために五カ国の軍勢を二手に分けて、織田勢である東美濃へ攻め入りました。

武田勝頼の家来である木曾義昌の本隊は、木曾福島から伊那路をぬけ上村に入り、織田方に味方していた串原・明智・飯羽の支城を攻め、他の一隊は木曾から攻め入り、霧ヶ原城・落合城・中津川督ノ城を攻め落とし阿寺城へ向かったとあります。

この時の逸話があり、阿寺城の守りが堅く数日かかっては水攻めにしようと、杣人に命じ斧で城に繋がる用水路の樋を切り落とさせました。この事から この地を斧戸と呼ぶ



《 阿寺城跡(概要図) 》



《 阿寺城跡〔虎口D〕付近 》

ようになったと云われています。

また、この水攻めに対抗し、阿寺城兵が櫓の上から谷間へ、米を水のように流し落とし敵を欺いたことからこの城を白米城と呼ぶようになったと云われています。

この時の阿寺城主 遠山友重も武田軍と戦いましたが討ち死にし落城、この城は廃城となってしまいました。今でも郭・土塁・堀切・石垣などの跡が残っています。

[阿寺城の概要]

- ・別 名 明照城、阿照羅城、阿手羅城
- ・所在地 中津川市手賀野斧戸
- ・道案内

手賀野の諏訪神社鳥居から、左の坂道を上がって行くと、手賀野配水上(浄水場)があります。この配水場から100m程前の路地を左折すると、すぐに道が二又に分かれますので、右手の川沿いの道を進み砂防ダムまで行きます。砂防ダム沿いを工事用の機材でできた橋を渡り、沢を進みます。そして、沢沿いの小道に石が門のように積んであるところで川を渡ります。川を渡ると「御嶽神社登り口」の標識があり、尾根まで登ると阿寺城にいたります。

◎阿寺城跡に御嶽神社が祭られています

- ・城郭構造 山城
- ・天主構造 不明
- ・築城主 不明(加藤景廉が築城したと云う記録もあります)
- ・築城年 不明
- ・主な城主 遠山氏
- ・廃城年 天正2年(1574)
- ・遺 構 土塁、郭、虎口、堀切、石垣など
- ・その他 遠山氏18支城の一つ

元亀 2年(1571) 遠山景任死去 ※元亀3年との資料もあり。

天正元年(1573) 武田氏家臣 秋山晴近 岩村城を奪取

天正 2年(1574) 武田勝頼 東美濃へ発向 18支城を攻略

天正 3年(1575) 織田信忠軍 岩村城を包囲

半年間包囲後、秋山晴近は降伏

3. ^{こまんば} 駒場・手賀野のはじまり

1. 「駒場」の由来

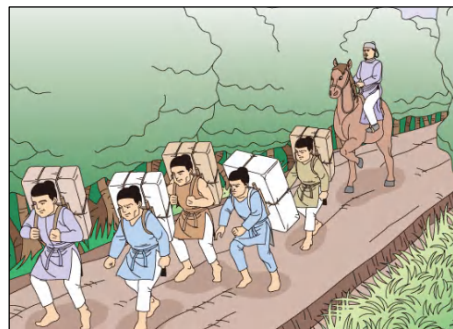
駒場の名前の由来は、古くは飛鳥時代にさかのぼります。

文化 2年(646)に「大化の改新」が發布された頃、中央集

権の国づくりに必要な法律と組織機構の基になった「大宝

^{りつりょう}

律令」が策定され、この支配体制を全国に及ぼすために、



東海・東山・北陸・山陽・山陰・南海・西海の七つの道を整 《街道は国を治める重要な役割を担う》

備しました。この路線は通行量などから大路、中路、小路に分けられ、この地域を通った東

山道は中路で、現在の中部・関東・東北を結び、30里(約16キロ)ごとに^{うまや} 駅を置いて駅ごとに
駅馬と馬子が備えられました。この馬が置かれた場所を駒場と呼ばれています。

人々は、米・布・特産物(税)^{ぜい ちやうてい おさ}を朝廷に納める時は、「国司」^{こくし}と呼ばれる役人^{いんそつ}に引率され、荷を
^{せ お}背負ったり馬に乘せたりして運びました。「駅」で馬を借りて次の「駅」まで行き、そこでまた馬を借り
て次の駅へと^つ乗り継いで都をめざしました。

この駒場にあったと言われる「坂本駅」^{さかもとのうまや}の東側の「阿智駅」^{あちのうまや}との間は、距離も長く急峻で東山
道で最大の難所の「神坂峠」(1,569m)を越えた場所にあり、そのため「坂本駅」では、30 頭近くの

馬を用意していたそうです。その馬(駒)^かを飼う場所＝「駒場」^{こまば}が必要になります。そこから今の

^{こまんば}

駒場の名前が付いたようで、やはり「阿智駅」の場所も長野県阿智村の駒場という地名です。

地域にあった「坂本駅」の所在については古来、湯舟沢、落合、中津川、駒場、千旦林、
茄子川と幾多の説がありました。

「坂本駅」が置かれた場所を検証する項目として

- (1) 大井駅と阿智駅の間点とすれば、茄子川では大井駅に近すぎる。
- (2) 駅の所在地にはかなりの部落(水田)用水(川)が必要である。
- (3) 古墳、五輪塔など有力な部落存在の証がある。
- (4) 駒場、大道上、町裏、駒の口などの地名が残っている。
- (5) 枅形が現存している。

以上の点から、郷土史家の幸脇孫作氏は文献研究と現地踏査によって、駒場こそ坂本駅

であることを論証しました。そこから駒場^{こまんば}の名前が由来していると考えられます。

2. 「手賀野」の由来

「当**手金野村**ハ**駒バ村**ト同村也、天正年中ノ頃 引別レテ**手金野**ト号ス、庄屋ハ岡本惣左エ門ト云者、**駒バ村**角田ト申処ニ居住ノ者ニテ、引別レノ節当村江引越シ、庄屋相勤メ追々勤メ来タリ候」岡本利平衛が慶応元年(1865)から「追々印ス」として書留めた「芥草紙」の冒頭に上の文章があります。

手賀野と号すとある村名であるが、手賀野のもとの形は**あてら野**であったという。「あてら」というのは、あちらの転じたもので嶺の反対がわのこと、転じて山頂、日陰の山などの意。(広辞苑)

「ら」は名詞を確立するための一種の語尾である。あてら城は岩村の本城からみて、山のむこうがわ、日陰の山にある。「あて」は一本の材木の日を受けぬ側、即ち成長が悪く節くれ立ち加工困難な部分のことである。これから物の良くないのを皆、あてといい醜女のことも、あてという。

従ってあてら野は荒れた地、日陰の野を意味しています。

一説には松源寺の前に円通寺という大きな寺があったので、てら野からてが野になったという。円通寺は今でも字名として名をとどめており、松源寺の山号は「円通山」です。

3. 村の大きさ

(1石＝約 180 リットル:米俵2.5 表:150kg: 大人が1年に食べる米の量)

地域(石高)		駒 場(772.00 石)			手賀野(446.54 石)		
年代	時代	戸数	人口	備考	戸数	人口	備考
1756	江戸時代	79	410		61	340	
1789		88	394	馬 51 匹	67	347	馬 42 匹
1870	明治時代	95	395				
1875					72	357	男 192 女 165
1876 1887		118			72 90	363	馬 56

4. 手賀野、駒場 地区の用水路

<手賀野第一用水>

旧本州製紙付近の手賀野字斧戸 465 より引水していて、幅一間(約1.8m)長さ4,824mです。
古くは手金野^{かみ} 上用水と呼ばれました。

慶長14年(1614)から始まった田畑開発に伴ってつくられたもので、約5年かけて用水路が完成しました。当時代官として開発に努めた吉田助左衛門にちなんで、「吉田用水」と別称されました。この時の開発による面積は14haで、東原、上原、小向井、西沼、狐塚、大道上などの小字をこの用水で灌漑^{かんがい}しています。(その後増加して約92haとなる) その後、明治42年(1909)に上宿方面へ延長されて、現在に至っています。(上宿用水の碑も建立されている)

大水により度々決壊し、復旧工事のための費用や人促などで大きな負担をしてきました。

【手賀野第一用水】(東原地内の用水添い)……記念碑の記述から

- ・中津川西部一帯に用水路が三本あり、一番大きいのを上ハ井水という。
- ・吉田助左衛門が 1595 年この地に移り住み、村人たちと相談して中津川の水を斧戸から引き、手賀野、駒場両村を潤うようにした。吉田用水ともいわれる理由である。
- ・明治32年東原から、上原、上宿まで水を通し、上用水と呼んだ。
- ・昭和41年水利組合を結成、改良工事を計画し昭和43年から5年がかりで手賀野と上宿を併せ、延長 6,457mの舗装工事を仕上げた。
- ・文禄から400年、美しくゆたかな流れを保ち 120haに及ぶ広い土地と、千軒を越す人家を潤しつつづけてくれた。

【上用水碑】(手賀野公園)……記念碑の記述から

- ・中津町手賀野の区民、中津川の水を引いて斧戸、小向井、会所沢の地に^{そそ}灌がんと考えてきた。
それから、駒場区上宿も水に乏しく、手賀野区に対して余流を分けてほしいと申し入れがあった。手賀野区民はこれを承諾し、明治32年 4月に完成した。
- ・これにより両区の荒れ地が良田になったところが少なくない。これこそ美挙^{びきょ}である。

【上用水の碑】(下町 秋葉神社境内から現在の上宿:中山道休憩所に移設)・記念碑の記述から

- ・墾田においては灌漑が最も重要である。灌漑が整えば、石ころが多くやせた林や丘でも良田となる。
- ・中津町駒場区上宿の里は、その見本である。……

＜手賀野第二用水＞

取入口は手賀野字斧戸707の 3付近で、幅三尺(約1m)用水路延長約5,200mです。

1521～1532 年につくられたと伝えられています。中津川市内の用水路として古い方に属しますが、詳しいことはわかりません。古くは手^{てがね}金野下井水、また本井とも呼ばれました。1700年代に大水で井口が流れたため、当初の斧戸沢口から川下へ掘替えて水を取り入れるようにしました。

用水路がつくられたころは、手金野村と駒場村は一村でありました。関ヶ原の戦後、両村が別の知行所(村役場)になって分かれたため、川除、引水などについて水論が時には発生しました。

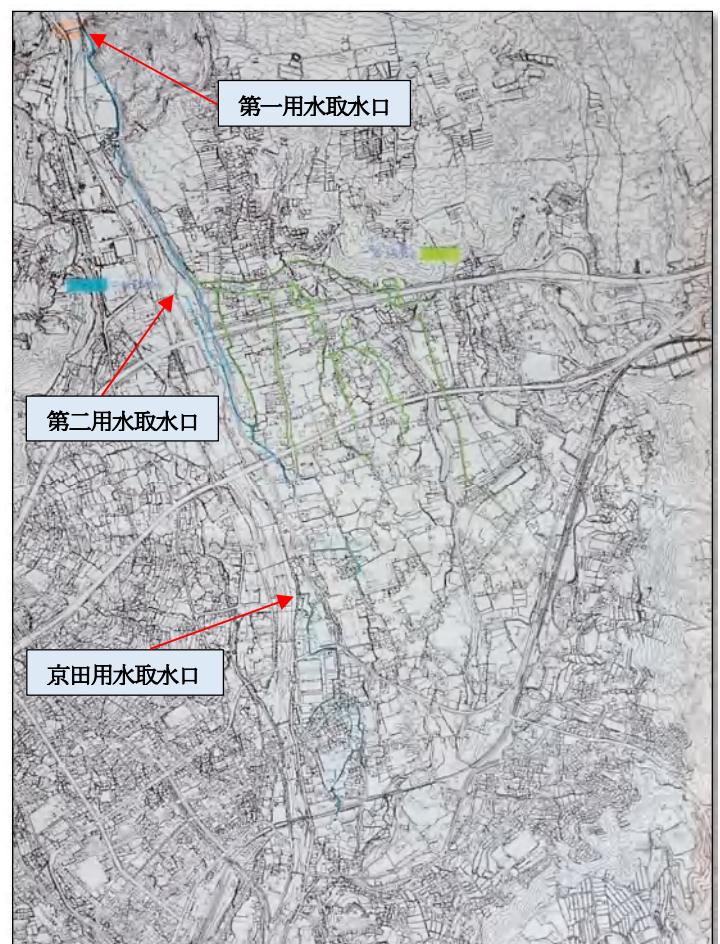
現在は上巾、下巾、中沼、島崎、町裏の小字を灌漑しています。灌漑面積は約35haといわれています。

手^{しもいみず}金野下井水^{ちぎょうじょ}においても、知行所の援助を得て村普請として用水路の修理を実施しており、用水が共同体としての村の大事な管理業務でした。1864 年 5 月の大雨で大水になり、戸下より85間にわたって欠けてしまいました。

修理には253両という多額の費用が掛かりました。大水は度々発生しました。

この用水もその度に修理のための費用をお上をお願いし、村から人足を出して復旧工事を行ってきました。

【手賀野第一・第二用水・京田用水 :取水口】



この他に手賀野、駒場関係で次の二つの用水路があげられます。

※知行所 :江戸幕府の旗本が知行として給与された土地の称

きょうてん
＜京田用水＞

取入口は手賀野字原61の3で、幅三尺(約1m)長さ1,627mで灌漑面積約15ha、下巾、京田、安森を灌漑しています。開設年月は不詳ですが、中津川(川上川)の駒場側にあった湿地を耕地にするためにつくられました。

よきど
＜斧戸用水＞

知行主 山村氏が直営で金40両をかけて開設したと伝えられています。

※知行 : その土地(所領)を治めること

【手賀野第一用水 : 水路図】



5. 中山道と苗木道

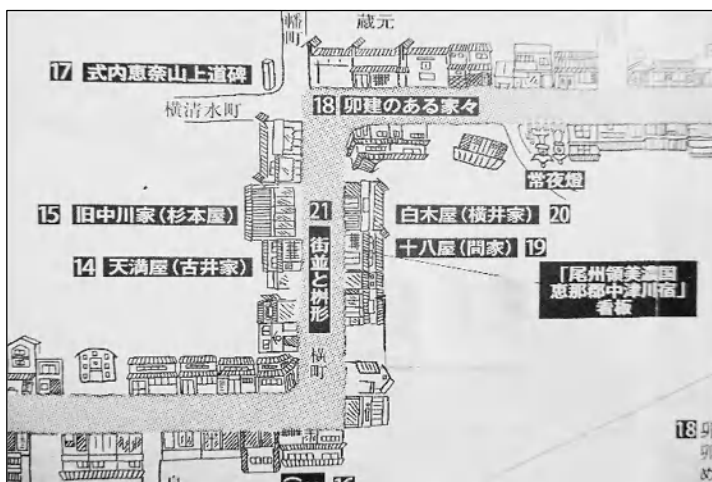
1. 中山道

江戸時代、中山道は東海道、日光街道、奥州街道、甲州街道と共に五街道と呼ばれる主要な幹線道路でした。中山道は東海道に比べると海路や大きな川がないので、海が荒れたり大水が出て川留めなどになることが少なかったのです。そのため皇族や貴族の娘たちが関東の(幕府の)役人や大名などとの婚嫁などで江戸へ赴く場合(皇女和宮の降嫁はその代表)、安全を考えて東海道よりも中山道を利用しました。そのため中山道は別名「姫街道」とも呼ばれました。



《 中山道 本町付近 》

江戸から京都に至る街道沿いには69の宿場町が設けられましたが、中津川市内には馬籠宿、落合宿、中津川宿の三つの宿があり、中でも中津川宿は多くの脇街道と交差していたので交通の要所となり、人々の行き来も多くにぎわっていました。これは中津川宿の大きな特色です。宿の町並みは中山道沿いに東から茶屋坂・淀川町・東新町・西新町・本町・横町・下町へと長さ約1.1kmにわたって一筋に伸びていましたが、通りは一直線でなく、中町から横町へかけては直角に曲げられた枡形づくりになっていました。これは宿駅の中心部を直接見通すことが出来ないようにと意図的に作られたもので、多くの宿場で見受けられます。現在では、当時の中山道の面影はほとんど消えてしまっていますが



《 枡形に曲げられた中山道 》

中町、横町、下町あたりでは、枡形になった道路や卯建の上がった屋根を見ることが出来ます。

中津川宿を出た後、中津川を渡り、柳町から石屋坂を上って、旧国道を横切り西に向かって進むと、こでの木坂に突き当たります。このあたりは、当時寂しい場所によくキツネが出没したそう

で、「若い娘がぽっとなるほどの美しいお百姓姿に化けて土地の娘を困らせた」といった昔話も残っています。こでの木坂を上ると上宿、さらに小石塚坂を上って手賀野村に入り、会所沢を経て坂本の千旦林へと続いています。

2. 苗木道

こでの木坂を上り切ったところで中山道の分岐点に出ます。分岐点には「左 中山道、右 苗木道」の標識が建っています。ここから中山道と分かれ北へ向かう道が苗木道(脇街道)と呼ばれています。

ここには、その昔「是より苗木道」と刻まれ道祖神(双頭一身道祖神・中津川市指定文化財)が建っ



《 中山道の分岐点 苗木道と中山道 》

いたのですがこの道祖神は、現在少し離れた位置に他の石仏と一所に集められています。

苗木道は苗木城へ通じる道だったので別名、殿様道、おなり道などとも呼ばれていましたが先は飛騨高山へも通じていたので多くの旅人たちが行き来し、賑わっていたと考えられます。

残念なことに現在この道は住宅や道路などによって分断されたり、地形が変わったり、草木が生い茂って完全踏破は出来なくなっています。でも僅かに残った痕跡をたどっていくと、当時のおおよそのルートをつかむことが出来ます。

分岐点から北へ進むと間もなく右手にこんもりとした森があります。ここには秋葉神社、白山神社、青木稻荷が祀られています。境内には、正面「庚申^{こうしん}」、側面に「右なへ木道 左やま道」と刻まれた石碑が建っています。当時は道しるべとして石段下の苗木道に沿った場所



《 津島神社境内の中道 》

にあったはずなのですが、いつ頃何故、境内に移されたのかは分かっていません。さらに進むと津島神社の鳥居前に出ます。ここからは鎮守の森に入りますが、この森の中道はその昔の姿を一番よく留めています。森を抜けると JR 中央線の線路をまたいだ位置に「えんこう庵」という尼寺があったので

すが、現在は廃寺になっていて残っていません。ただ付近の人々は この周辺を「えんが」「えんくわ」と呼んでいますが寺名が訛^{なま}ったものと考えられます。坂を下って道路を横切り、後田川を渡ると「しょうのみや」に至ります。これも「塩の宮」の訛りですが、そこには底なしの沼があり、水が塩辛くて、当時は海に通じていると恐れられていたそうです。

杉の子幼稚園の脇を抜け、苗木坂が詰まって「なぎさか」と呼ばれる西が丘の住宅街の中道を上り、市道と分かれて山林へ入ります。

林の中は薄暗く当時の面影を残しています。

昔を知る人の間には「両側の高くなった谷道を通っていると、狼がびゅっびゅっと頭の上をとび交わって、狼の後ろ足がちょんまげにちょっと触ったげな」「立ち



《 西ヶ丘区の「なぎさか」を登ると元競馬場 》

止まって『もう送ってこんでもいい』と言わんと、送り狼は何時までもついて来るもんや」「設楽の森までいいつぎ(回覧板)を持って行くのはおそがかった」、などという話も残っています。

この話は当時この辺りにも野生の狼がいたことを物語っています。

この「なぎさか」を上りきって下ると、中津商業高校の第二グラウンド(元競馬場)に出ます。

このグラウンドのまん中を南北に横切り、畑中の道を通して木曽川に向かって「すなさか」(花崗岩風化した文字通りの砂坂)を下って行くが、狭い上にかなりの急坂です。この「すなさか」を殿様の立派なお駕籠を傷つけぬように運ぶことは、さぞ難儀であったことと思われます。

こんな話も残っています。「殿様が坂を下るとき、くたびれたでちょっと休ませてくれと言われた。ちょうど畳の表替えをしていたので新しい畳表を出して座って貰った。勿体ないのでその畳表はそのまま蔵へいれてしまっている」

「すなさか」を下り切ると、設楽の森にでます。この森を抜けると木曽川に突き当たり、眼前に苗木城を仰ぎ見る事が出来ます。江戸時代にはここに尾張藩御用の川狩番所小屋があり、木曽川を筏で下る材木の取り締まりをしていました。

6. 町村の合併の歴史

〈明治の合併〉

慶應 4年(1868) 4月25日 美濃に笠松県が創設されました。明治 元年(1868) 明治維新により駒場村・手賀野村は名古屋藩となり、明治 4年(1871)廃藩置県により笠松県の駒場村・手賀野村に、中津川村は高山県(飛騨地方)とともに岐阜県に所属しました。

明治 5年(1872) 明治初期に設置された最高官庁^{だじょうかん}の太政官の布告によって、中津川村・駒場村・手賀野村三か村の戸長役場が中津川村におかれました。その後、明治11年(1878)7月22日布告の三新法で郡区町村編成法が發布され、これまで地方の実情に合わない大区小区制を廃止し、旧来の郡町村制に戻しました。これにより明治12年(1879) 恵那郡が発足し、郡役所が大井町(恵那市)に設置されましたが、翌明治13年(1880)に中津川村に移設されました。

《 下は中津町駒場・手賀野の字図 》



明治22年(1889)) 中津川村は7月1日に町制施行によって中津川町となりました。

明治29年(1896)中津川町・駒場村・手賀野村の合併協議が始まり、明治30年(1897)

駒場村は手賀野村と合併して駒賀野村とする案を議決しましたが、手賀野村は中津川町と駒場村との合併に賛成し、4月 2日の岐阜県告示で1町2村により「中津町」が誕生し、大字駒場に第三区(上宿)・第四区(下町)・第五区(尾崎・中切)・第六区(橋場)が、大字手賀野には第一区(上組)・第二区(下組)が設置されました。

〈 昭 和 の 合 併 〉

昭和22年(1947)に日本国憲法と地方自治法が制定されました。

中津町は中津川市に昇格するため、周辺の町村に合併を呼びかけましたが昭和26年(1951)苗木町のみが合併して「中津川町」となり、昭和25年(1950)の国勢調査人口では28,590人で市制に必要な3万人に足りないため、指定統計の承認を受けて人口調査を行い、昭和27年(1952)2月20日現在30,987人であったことから、岐阜県議会の承認をもって昭和27年(1952)「中津川市」が市制を施行しました。ちなみに、新市の名称案は「恵那市」でした。

坂本村の千旦林地区は中津川市へ合併賛成でしたが、茄子川地区は西の大井町(今の恵那市)への合併賛成が多く調整が続ぎ、昭和29年(1954)に岐阜県議会が中津川市への合併を承認しました。落合村は昭和31年(1956)に合併、阿木村は阿木川上地区のみ中津川市へ合併する案がありましたが、昭和32年(1957)に全村で中津川市に合併しました。

長野県西筑摩郡(木曽郡)神坂村は、昭和32年中津川市とともに長野県・岐阜県両知事に合併申請書を提出し、以来岐阜県への越県合併の強い運動が行われましたが、峠・馬籠・荒町地区を山口村へ、湯舟沢地区を中津川市へ合併と決まりました。

長野県議会は一時的に反対しましたが、中央審議会が分村に賛成し、昭和33年(1958)中津川市へ合併となりました。



《 写真は昭和32年頃の越県合併運動 》

〈 平 成 の 合 併 〉

平成になると、市町村合併促進法が交付され、旧恵那郡の11町村は中津川市と恵那市に合併を提案しましたが範囲が広いとして協議の結果、恵北地区6町村は中津川市に、恵南地区5町村は恵那市に合併することになりました。その後、恵北地区の加子母村・付知町・川上村・坂下町・福岡町・蛭川村と合併協議を重ね、さらに密接な交流のある木曽郡山口村(馬籠地区を含む)では住民投票の実施と長野県議会の議決を経て、平成の合併で唯一長野県から岐阜県中津川市へ編入合併し、平成17年(2005)2月14日に1市3町4村で新「中津川市」が誕生しました。

7. 美山街道

＜中津川の主要街道＞

中津川の主要街道としては、中山道、^{しずも}賤母街道、飛驒街道、美山街道が挙げられます。

中山道は近世を通し江戸と京都を結ぶ主要幹線で、幕府の保護のもとその交通が保たれました。賤母街道は、明治期に中山道の馬籠峠は傾斜が強く距離も長いので変更され、賤母に新道を開くことになってできた街道で、現在の国道19号です。飛驒街道は、東美濃と飛驒を結ぶ重要な脇街道で、一名^{なんぼく}南北街道とも呼ばれます。

明治に入り中央集権が進む中で、道路行政の法が整備され、それに基づいて管理されるようになりました。また、道路の等級や道路費の大まかな負担区分も定められました。さらに、明治9年(1876)6月には太政官通達60号によって、国道・県道・里道の区分と等級を定め、全国的な道路整備に着手しました。美山街道の整備もそうした流れの一環であると考えられます。

＜美山街道＞

美山街道は、手賀野村・駒場村を貫く街道で川上に至り、阿木川上より根の上高原を越え、阿木村に至り、更に大井街道に達する道路です。中津川から恵那郡南部に通ずる主要街道の一つでしたが、今日では殆どその存在すら忘れられ、雑草の繁茂する廃道の一部が当時の面影を偲ばせています。

美山街道の開削工事の着工は、明治27年(1894)の末であったと考えられ、阿木村大井街道に達する路線の全線が開通したのは、明治42年(1909)頃であったと推察されます。また工事にかかる費用は、この地域の道路組合費や町村の負担金が当てられました。

美山街道は、はじめ2つの路線案があり、第一案は手賀野より山岳を経て通る路線、第二案は川上郷中を通る路線で、第二案が採用されました。(川上の強い要望によると考えられる。)

＜美山街道の道筋＞

中山道の中津川橋付近(現柳町)理髪店横に細い道筋のある付近から分岐し、ほぼ中津川沿いに株式会社ハラモク前から、三菱電機株式会社中津川工場の敷地内を通り抜け、工場正面の近くで旧国道19号を横切り、そこから株式会社市岡製材所、東邦パック工場の間を抜け、県道東野・中津川線を一部重複して国道19号線を通り抜けると松源寺前に至ります。



さらに、松源寺前から南へ進み中央自動車道を越すと株式会社東原工業所前に出ます。そこからは一筋の街道となって、右側の用水路(手賀野第一用水)とともに中津川と平行して延びています。

川の対岸には王子製紙株式会社(現王子エフテックス株式会社)の工場が並び、更に進むと山裾の谷間に美山橋が架かっていて、当時の街道の名残を留めています。そこから梶島橋に至ると、雑木林の中に旧街道の面影を残す道筋が続いています。

近くには、安政元年(1854)11月建立と明記された水神神社、山神神社の社殿が見られます。更に進むと路傍には苔むした岩石が横たわり、急峻な場所には今も石垣が残っています。所々寸断されているが道筋はほぼ確認できます。

しばらく進むと街道跡の両岸には巨石(岩)が^{そび}え、その間を掘削して街道は作られています。その巨石の基に明治39年(1906)2月 9日建立の馬頭観音像が祭られています。更に十数mほど進むと、そのあたりからは旧街道は中津川の洪水で流失し確認出来ません。

川を渡ると、約100m右手に再び旧街道の道筋が確認できます。急峻な山裾を中津川とほぼ平行して進むと尾ヶ岩に至り、尾ヶ岩から川上橋付近に至るまでの区間は、街道は流失して道筋は確認できませんが、急峻な山相からほぼ川沿いに旧街道は続いていたと推察できます。

川上橋を渡ると右側の山裾に旧街道は続いていたと考えられますが、現状は水田や畑となり確認はできません。宮前橋から右に登ると旧川上分校旧校舎跡に出ます。その旧校舎下から水田地帯に細い道筋が残り、わずかに街道の名残を留めています。

そこからは、国道363号と一部共用して根ノ上高原に至り、さらに広岡地内の国道363号とほぼ重複して大井街道に達します。

この街道は、中津川より山越えて恵那郡南部を結ぶ路線でした。この街道の敷設については川上地区の人々の願書が伝わっています。「手賀野から山岳を越えていく路線より、川上を通る路線のほうが、炭や薪、木材の運賃が今までより安く(3分の1)なり、将来に渡って中津川町の利

益になるので、この路線を開くために町からの補助をお願いしたい。」という主旨です。

＜中山道から分岐して 手賀野に至る道筋（公図より）＞



8. 明治天皇が通る

明治維新後、明治天皇は日本の近代化の状況を視察するため全国を行幸し、四度目の明治13年(1880)6月には東京から甲州道中・中山道・下街道・東海道・伊勢街道を通り伊勢神宮で折り返し、伊勢別街道・東海道を滋賀県から京都の御所へ入られました。天皇の通られる数日前には、前触れと呼ばれる数人の役人が下見をしました。

木曽郡三留野村(後に読書村から南木曾町へ)旧本陣で宿泊され、落合村の旧本陣で御小休みになり、中津川村旧脇本陣までは平輿^{へいこし}で来られ御小休みになって中津川からは二頭立ての馬車で進まれました。

中津川の橋を渡り石屋坂を上り米田川(前川)を渡り、「こでの木の坂」は急坂で馬車が登れないため、駒場村の青年13人が浴衣にメリヤスの股引きに白足袋姿で、二本のさらし木綿の綱をつくり馬車を懸命に引き上げました。



《上宿 一里塚の「明治天皇碑」》

上宿の一里塚跡の場所に「^{「めいじてんのうごほうれんまへがけ}明治天皇御鳳輦前驅奉仕蹟」の石碑が建っていますが、こうした標示は全国でここだけです。

その時のお礼に、「宝永通宝」が100枚下賜されました。いまでも大切に保存されている方がいます。

この通行には約450人が随行し、木曽郡神坂村馬籠(中津川市)からは恵那郡瀬戸村と苗木村(中津川市)の80人と馬が荷物を運びました。

恵那郡茄子川村(後の坂本村・今の中津川市)の篠原家で御小休みになり、恵那郡大井村(恵那市)で宿泊されました。明治天皇が伊勢神宮を参拝されたのは、持統天皇の参拝以来で二人目です。



《御礼に下賜された「宝永通宝」》

9. 中央線の開通

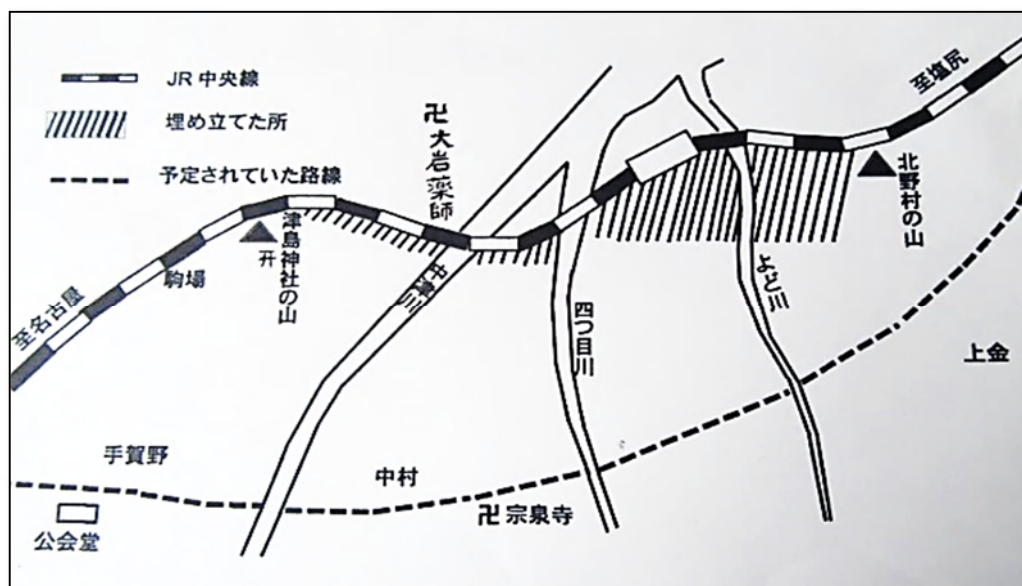
明治24年(1891)に明治政府により、「建設中の東海道線は海から艦砲射撃を受ける危険性がある。」とされて、東京～名古屋間を連絡する重要な路線として「中央線」が計画されました。

明治25年(1892)の計画において、諏訪から西を通る案が三案あり、その**第一**は諏訪～飯田～足助～名古屋の案、**第二**は諏訪～飯田～清内路～中津川～名古屋の案、**第三**は諏訪～塩尻～木曽福島～中津川～名古屋でしたが、木曽の人たちや中津川の人たちは東京の国会へ出かけ、それぞれ自分たちの街の方を通るよう働きかけ、その結果西筑摩郡(今の木曽郡)を通る案に決まりました。

明治29年(1896)に名古屋と東京の八王子から工事が始まり、明治33年(1900)に名古屋～千種～勝川～高蔵寺～多治見～土岐津(今の土岐市)～瑞浪が開通し、瑞浪～釜戸～大井(今の恵那)～中津間は、明治35年(1902)12月21日に開通しました。

中津川を通るはじめの計画では、西方面の小石塚～上宿～手賀野公会堂前～中村宗泉寺前～茶屋坂の案で勾配が1,000分の20(1,000m進むのに20m坂を上る)程度で緩くできるように考えられていました。そして中村の宗泉寺付近に駅をつくる案がありました。

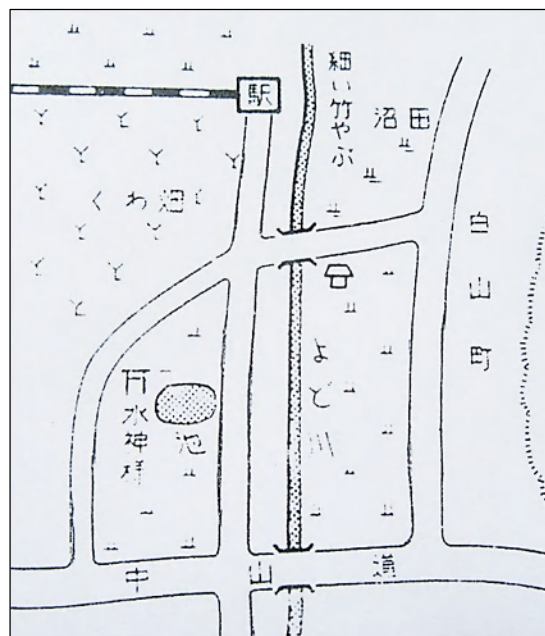
《 下図の点線は 当初の中央線計画路線 》



けれども地元、中村の人たちは「田んぼが減る！」と反対したため、今の線路が通る案(勾配1,000分の25)に決まりました。そうなる勾配が急になる上に津島神社の裏側は急なカーブになり大きく窪んでいて、この場所を埋めて高くする必要があるがって悩んだ末に、小石塚付近からトロッコに土を乗せ約1km運んで埋め立てて造りました。

また、当時の駅付近は沼地で埋め立てなければならませんでしたので、東側の中川神社付近は茶屋坂から続く丘陵地であったのでその土を掘って運んで埋め、駅のホームに敷く石や中津川を渡る鉄橋の橋脚の石、そして当時としては全国的にもめずらしい石の地下道には、桃山の大岩薬師付近に大きな花崗岩があったので(今はロイヤルマンションが建つ場所)、ここから石を切り出して使われました。

明治35年(1902)12月21日に名古屋駅～中津駅〔明治44年(1911)6月中津川駅になる〕が開通し、アメリカ製のB6と呼ばれる2120形式の蒸気機関車が一日4往復走り名古屋への上りは平均3時間12分、中津川への下りは平均3時間40分かかり、汽車賃は3等車で片道28銭(運賃で米を買うと約3.5kg・現在運賃1,320円換算で米は約3.3kg)でした。



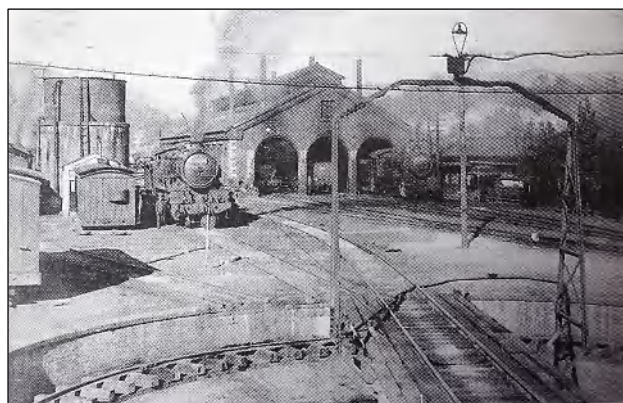
《 上の絵は中津川駅が出来たころ 》

中津川駅には蒸気機関車の検査や整備をおこなう「機関区」が設けられ、他に「保線区」「車掌区」「診療所」「物資部」「官舎」なども設けられ、最盛期には約2,000人が働いていました。

第二次世界大戦直後は、軍需工場や軍隊から帰る人、海外から引き揚げて来る人で列車は鈴なりになり、窓から乗り降りするほどでした。本町公園に展示されている「D51型蒸気機関車」と同じ型のものは、昭和21年(1946)7月30日から中津川機関区に配属されました。

〈 戦後の中央線 〉

D51型蒸気機関車は戦後も中央線を走り続け、沿線の市町村から無煙化の要望が出てこれを推進するために、関係市町村は日本国有鉄道(国鉄)が発行する特別鉄道債券(利用債)2億4千万円を引き受けました。これによって蒸気機関車から車両はディーゼルカーになり、トンネル



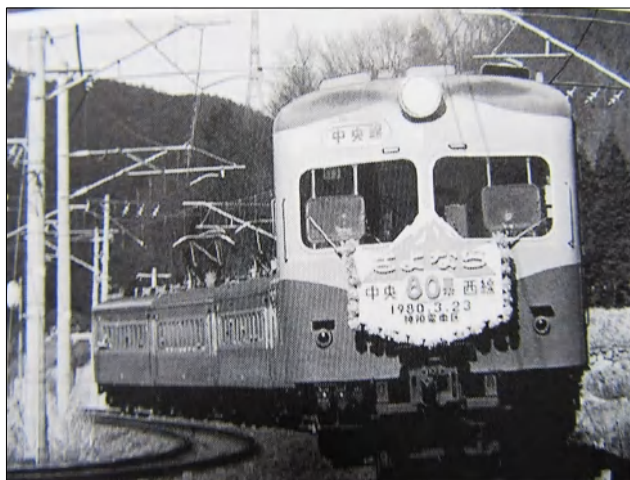
《 戦後の機関車庫と転車台 》

に入っても窓を閉めなくてもよくなりました。

さらに日本経済の飛躍的な成長により、鉄道利用者の増加とともに利便性と快適性の向上を目的に、中央線の沿線市町村はまとまって複線電化の要望を出しました。それにより事業資金調達を目的とした国鉄が発行する特別鉄道債券(利用債)30億円を岐阜県の関係市町村が引き受け、国鉄による工事が始まり昭和43年(1968)10月に中津川まで複線電化され、横須賀線で使用されていた電車が走りだしました。けれども、駒場(第五区)の米田踏切から中津川駅の間は、単線で運行されていました。その後、一級河川「中津川」に上り線専用の橋を架け、複線電化から19年後の昭和62年(1987)11月になって、完全な複線電化となりました。

これまでは蒸気機関車の急行「きそ」、「ちくま」が名古屋～長野間を走っていましたが、中央西線(名古屋～塩尻間)が昭和48年(1973)5月に全線電化されると、7月から振り子式(カーブで車体を内側に傾斜させ遠心力を打ち消す)特急「しなの」が走るようになりました。

昭和53年(1978)10月に、鉄筋コンクリート造りの新しい中津川駅舎が完成しました。



《 長年運行した80系電車 さよなら運転 》

ちなみに、駅のホームやトンネルに「レンガ」や「石」が使われている場合がありますが、近くで「石」が採れる場合は石を切り出して積み上げておりますが、石が採れない場合はレンガを手配して工事をしています。

昭和62年(1987)4月1日には、「日本国有鉄道」から「東海旅客鉄道株式会社・JR東海」になりました。

今も津島神社裏側の中央線を走る、特急列車ワイドビュー「しなの」(名古屋～長野間)はコンピューターによりカーブの手前で自動的に傾斜し高速で走行しています。



《 津島神社北側を走る特急ワイドビュー 》

10. ^{よう さん}養蚕の発達

明治 4年(1871)に、落合村の上田庄蔵という人が神坂村に風穴を発見し、風穴養蚕をはじめました。風穴は山の中の自然の穴で涼しい風が当たり、蚕の^{ふか}孵化時期を遅らせて出荷できるので神坂の風穴の養蚕は全国有数の製造地として知れ渡るようになりました。この上田庄蔵は、昭和 3年(1928)の昭和天皇即位御大典に際し、「越年風穴夏秋蚕製造への貢献が顕著」として、蚕業功労者の表彰を受けました。



《 神坂「霧ヶ原」の風穴入口 》

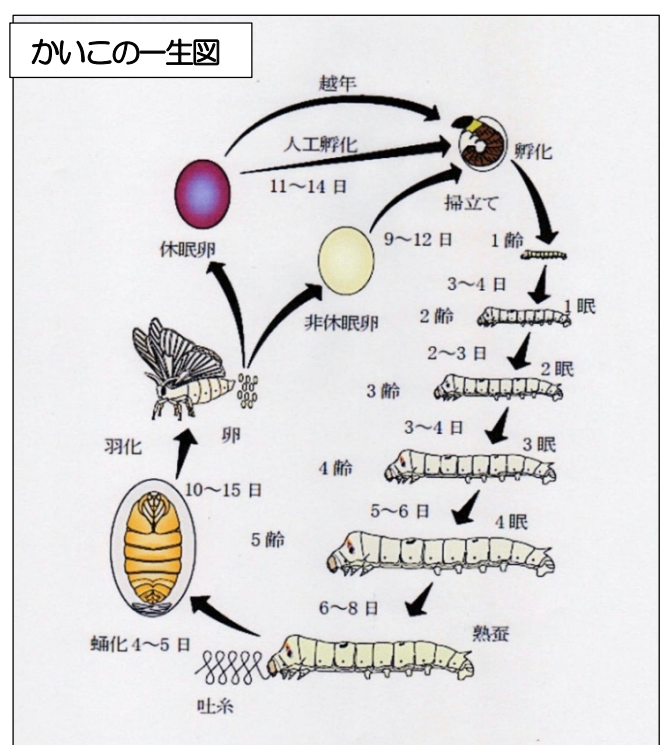
明治14年(1881)ころになると駒場村でお蚕を飼う仕事が始まり、多くの畑に桑の木が植えられこの葉を摘んで蚕に与えました。岐阜県から22軒のうち駒場村の 1軒が鑑札を受けて始めました。

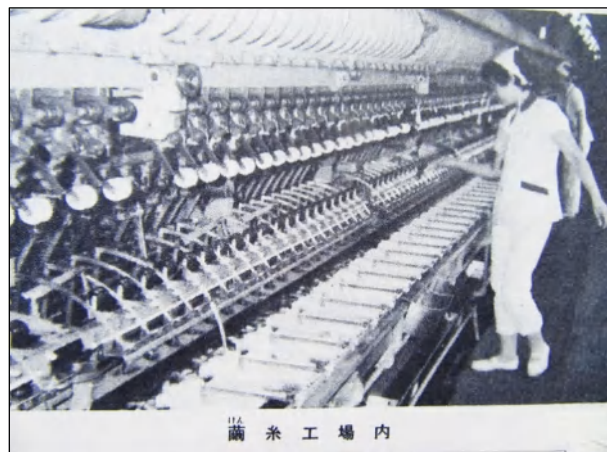


《 蚕のえさになる桑の木が植えられる 》

明治19年(1944)になると中津川蚕系組合事務^{はるかいに}所に春蚕検査所がつくられ、広がってきました。

大正 9年(1920)には第一次世界大戦後の大不景気で横浜から輸出していた生糸の価格が大きく下がったため、横浜から海外に輸出していた中津町の勝野製糸は大正11年(1922)以降赤字経営が続き、昭和 6年(1931)12月に「株式会社勝野蚕種部」を独立させ、倒産してしまいました。困った生産農家は恵那郡の町村長たちと相談し、昭和 6年(1931)4月に駒場(今の柳町)に中津生糸販売組合(組合製糸=組合員588人)を設立しました。





《 柳町に作られた組合製糸の全景と繭糸工場の状況 》

昭和 8年(1933)には養蚕実行組合ができ、上宿組合13人、尾崎組合14人、西山組合 8人、手賀野第一組合33人、手賀野第二組合25人が生産を行っていました。

昭和14年(1939)には、勝野製糸の工場跡地の淀川町に「近江絹糸中津川工場」が開設されました。(現在はスーパーマーケット) 第二次世界大戦が始まり、農林省は食糧を増やすため桑の減反命令を出し、大切にしていた桑の根を掘り起こし大豆や小麦を作り養蚕は縮小されました。

終戦直後、国内では食糧不足が続き外国からの輸入に頼るしかなく、輸出で外貨を得るためGHQ の命令で、昭和20年11月に蚕種や桑苗が朝鮮・中国・ソ連に、翌年には退蔵生糸がアメリカに輸出され、見返りに大豆や小麦などが輸入されています。 その後、恵那地域の養蚕は日本経済と同様に復活し、昭和26年2月に生糸1表(60kg)30万5千円の史上最高の値を付けています。こうして昭和25年(1950)～32年頃まで繭糸工場では利益金を出すようになり、農家の人が育てた「お蚕さんがだす生糸」から高級な絹布(シルク)ができて外国にも輸出し、機械を「ガチャン」と動かすと「何万円」にもなるというガチャマンという時代がありました。

昭和50年代には、霜による桑の葉の被害や燃料の重油の高騰、中国や韓国からの安い生糸の輸入が続き、平成 7年(1995)3月になると「組合製糸」は閉鎖され、平成12年(2000)に工場は取り壊されました。平成14年(2002)にこの土地を中津川市が買い取り、現在は「発達支援センターつくしんぼ」と「中津川保育園」が建っています。



《 現在の組合製糸跡地の全

1 1. 競馬場が出来た

県立中津商業高等学校から西側へ約300mの所にある高台に、平らで広い土地があります。

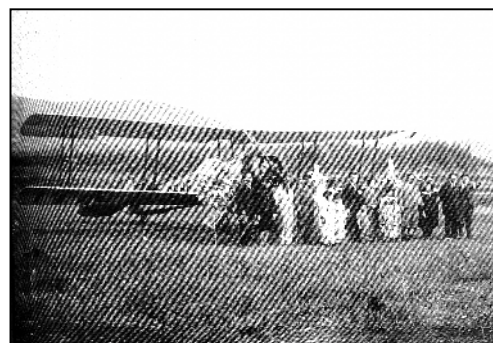
現在、ここには中津商業高等学校の第二グラウンドと果樹農園や畑地に利用されています。

この場所の昔を知っている年配の方や伝え聞く方は、この付近を「競馬場」と呼んでいます。

昭和のはじめ頃、畜産と地域の振興を目的に駒場の竹村寿吉氏が競馬場の誘致をめざして成木亀左衛門氏らと共にその実現に奔走しました。昭和 2年(1927)農林・内務省令地方競馬規則公布で、県内に海津郡高須町と恵那郡中津町駒場の二箇所で開催されました。駒場西山では「中津競馬倶楽部」を設立し、競馬場の造成に多くの人が働きお客さんのために観覧席もつくられ、毎年春と秋の2期、合計67回開催されて近郷近在から観客が集まり、にぎわいました。けれども、山間僻地^{へきち}で交通の便が悪いため入場者が500人に満たないときもあって馬券の売り上げは年5万円しかなく経営不振に陥り、昭和8年秋の開催を最後に幕を閉じました。

昭和10年(1935)には、羽島郡笠松町「笠松競馬場」が開催され、開催権を移行しました。

その後、競馬場跡地の内中津商業高校に近い9,245坪の用地をPTAによって約1,300万円の予算で買収、整地され昭和42年9月4日第二グラウンド開きが行なわれました。この地の南西側中段に、競馬場の安全を願い昭和 4年建設の馬頭観世音が当時の面影を残し、隣に「苗木道」の名残と思われる文化14年(1817)と彫られた馬頭観音が祭られ、西ヶ丘区の皆さんでお守りしています。



《昭和 10 年飛行機が競馬場に来ました》



《「競馬場」を造成中に多数の石器類が発見されました》



《「競馬場」の閉鎖後は農地として利用》

12. 西山の開拓と栗栽培

西小学校から、笠置山の方を見ると、小高い丘の上に「中津川市民病院」が見えるでしょう。ここは、昔から「西山」と呼ばれている地域です。木曾川の河岸段丘の最上位・赤土平層で、丘の上は坂本地区に向かってずっと平らになっています。

今は、この小高い丘から何人もの子ども達が学校に通っていますが、大正の初めまでは誰も住んでいませんでした。丘の上ですから、川は流れておらず、清水も湧かず生活用水、農業用水がなかったからです。

人が住めないこの地には、野生の動物たちが沢山いて、人々は狩りにきていたのでしょう。畑を耕していると矢じりが出てきます。高台の下の後田からは縄文時代の石器、土器がたくさん出ますから、この矢じりを作った人は、後田から来たのでしょうか。



《 駒場の西山地内で発見された石器 》

無人のこの高台の土地に最初に住み始めたのは、林^{よはち}与八氏です。今から100年程前の大正2年(1913)でした。木を切り根を抜き、畑にする作業はとても大変でした。同じ頃、近くに住み始めた安藤氏は、「自分の指の形に鋏^えの枝が凹んでいた」と話してくれました。重労働だったことが想像できます。住み始めて困ったことは、やはり水でした。いくら深く井戸を掘っても水が出ないからです。山の下に何度も水を汲みに行きましたが、それも大変です。しかたなく、地面に深い穴を掘り、水が漏れないよう粘土質の土を貼り付けて、貯水タンクを作りました。そこに雨水を入れて生活用水としました。水がないと困るのは、人間ばかりではありません。畑で出来る野菜も長い間雨が降らないと、出来が悪く時には枯れてしまいます。水が少なくても出来る作物はないかと色々試して、たどり着いたのが栗でした。栗ならば、雨が少なくても育ちます。



《 40年以上前の市民病院横の道路 》

開拓した土地にたくさんの栗を植えました。面積は10haと言いますから、西小学校の敷地の10倍程になるのでしょうか。その頃の写真が残っていました。両側は、栗畑です。栗畑の向こうにうっすらと見えるのは、前山、恵那山です。

大正の終わり頃になると、新天地を求めて人々が移り住み始めました。その人たちもやはり栗を植え20haにもなりました。中津川市だけでなく、東美濃地区でも一番たくさんの栗が植えられたこと



になります。秋になるとたくさんの栗が収穫できました。集めた栗は木の箱につめられ、トラックに乗せて毎日名古屋の市場に運んで売りました。中には、遠く海外にも輸出されたものもありました。栗を載せたトラックの前で写した、その頃の写真です。一日分ですので、沢山の量が収穫されていました。

《 収穫した栗を名古屋の市場に出す 》

下の写真は栗の苗を掘っているところです。たくさんの人が作業していることが分かります。市民病院があるところには、栗の苗がたくさん育てられていました。右下の写真は、堀りとった栗の苗を馬車の荷車に乗せたところです。縄でしっかり縛るため、飛び上がったところが写してあります。この栗の苗も国内の各地に売るだけでなく、韓国やアメリカにも輸出されました。今から70年くらい前のことです。



《 西山の畑では栗の苗木も育成する 》



《 苗木は全国各地や海外へ販売した 》

昭和12年(1937)から始まった日中戦争、そして引き続いた第二次世界大戦は栗栽培にも暗い影を落としました。西山地区からもたくさんの若者が戦争に行き、戦死して帰ってこない人もありました。戦争が激しくなると、食料が不足し農産物の栽培のためにせっかく植えた栗の木を、切らなくてはなりませんでした。

戦争が終わってから、地域の栗栽培者の努力により、また栗の栽培が開始されました。

〈 栗の品種改良への取り組み 〉

栗の振興に欠くことができない取り組みとして、地域関係者のたゆまぬ研究と努力によってこれまでにない新しい栗の品種が次々と生み出され、日本中に広がっていきました。

「林１号」「林甘栗」(林与八氏)、「金華」(塚本實氏)、「胞衣３号」(新田耕三氏)、「えな宝来」「えな宝月」(中山間試験場)です。どの栗も、これまでにない素晴らしい性質があり、多くの人々が栽培をしています。

西山にある岐阜県中山間地農業試験場(現農業研究所中津川支部)において、塚本實氏は、お年寄りでも女の人でも大きな実がたくさん収穫できるようにと、栗の木を低くする剪定の方法を考え出しました。

低樹高栽培、超低樹高栽培という方法で現在、私達が目にする栗の木の選定は、ほとんどがこの方法で行われており、全国各地の栗栽培農家にもこの選定技術が注目され、そして普及し実施されています。

栗畑は、市民病院のまわりだけではなく、西小学校から見える小高い山の上にずっと広がっています。



《 低く選定した栗の木が普及する 》

この地域は、岐阜県でも栗栽培の長い歴史があって、もっとも栗栽培のさかんな地域の一つです。西山の栗は、市内の菓子店舗はもとより恵那市内の菓子店舗に買われ、栗和菓子や「くりきんとん」として使われています。

最後に、開拓で苦勞した水のことを加えておきましょう。

長年、地域の農業者の悲願であった農業用水が、付知川から木曽川に橋を架けて渡ってきましたのは、昭和54年(1979)のことです。この付知川右岸用水を活用した西山の開拓パイロット事業によって栗だけではなく、落花生、トマト、キュウリ、ナスなど、色々な野菜が栽培できるようになりました。

13. 西山地区 開拓パイロット事業

木曾川に近い駒場と千旦林地内にかけての高台は、標高 300m から 400m の丘陵地きゅうりょうちで通称西山台地と呼ばれ、木曾川までの落差は100m 程ありました。

明治、大正、昭和にかけて、この台地を農地に利用するために幾度も開墾が試みられましたが、大規模なものは安定した水利が得られず農業には利用が困難な場所で、生産性の低い山林原野がほとんどを占めており、放置しされていた土地でした。

戦前から戦後にかけての食糧不足は国民生活に大きな陰かげを落とし、終戦後の国の復興に米を中心とした農産物の増産ひっすは必須の状況でありました。このため、国では農業振興を目的に全国で農地造成事業を進め、昭和22年(1947)に当時の恵那郡福岡町、付知町で560ha の開田を目指して計画されました。昭和26年(1951)農林省が計画を承認し、昭和28年には国営事業「付知川右岸地区」として農地造成工事と共に、付知川より灌漑用水を毎秒1.82m³ の取水を目指し、幹線水路約12kmの工事に着手しました。しかし、昭和35年当時には計画当初の食糧生産計画と事情が変わり米が余ってきたことから、農林省としては米作をこれ以上進めることが出来なくなり、当初の開田面積560ha を400ha に縮小し、これによって毎秒0.65m³ の水が余ることになりました。この当時の市長間孔太郎氏は、この余剰水よじょうを利用した開拓計画を行なうため市議会に「付知川右岸用水特別委員会」うがんを設置し、受益地の農業者等と協議・研究して農林省、岐阜県に陳情を行い、毎秒0.65m³ の水を水田の使用量の5分の1ですむ畑地灌漑かんがいに利用することで山林原野約450ha を対象に農地開発基本計画を策定しました。この結果昭和38年(1963)9月4日の事業採択さいたくの発表に、地域農民の喜びと感激は大変に大きなものでした。

昭和39年度に認可され全体設計書を完了し、昭和40年度に岐阜県営開拓パイロット事業として工事に着手し、併せて中津川市西部土地改良区が設立され、市との事業協力体制が確立されました。事業が開始された矢先の昭和43年には、米の生産調整の一環として政府の第一次開田抑制政策よくせい、引き続き昭和44年に第二次開田抑制政策によって、開田計画からの除外や開畑への転換が示されましたが、当事業は当初計画のとおり認められました。

昭和45年(1970)に開拓事業制度が整理統合され、西山地区は開拓パイロット事業を「農地開発事業」に名称変更しました。この間、国の経済進展に伴って農業を取り巻く諸条件の変化は、

事業進行に少なからず影響を与え、この事業は当初五ヶ年計画で事業費6億円余の岐阜県事業として着手したが、農業経済情勢の変化と営農の近代化に加え、昭和48年のオイルショックによる諸物価の値上げや工事の遅延と経費の増大は著しく、総額15億1千7百44万1千円となりました。昭和40年度(1965)に着工し昭和52年度(1978)まで、12年の歳月をかけて完成しました。

工事概要は、国営付知川右岸地区の水源端末旧福岡町木積沢地内から、直径800m/m の高圧ヒューム管、鋼管でサイホン工法を活用し、毎分0.65 m^3 の用水量を落差120mの位置の木曾川に架けられた「源済橋」(水管橋)を経て、高低差20m 地点の西山地区内のサイホン吐き口に設置の円形分水工から駒場・千旦林地域の農地整備面積 286.38ha に灌漑されています。

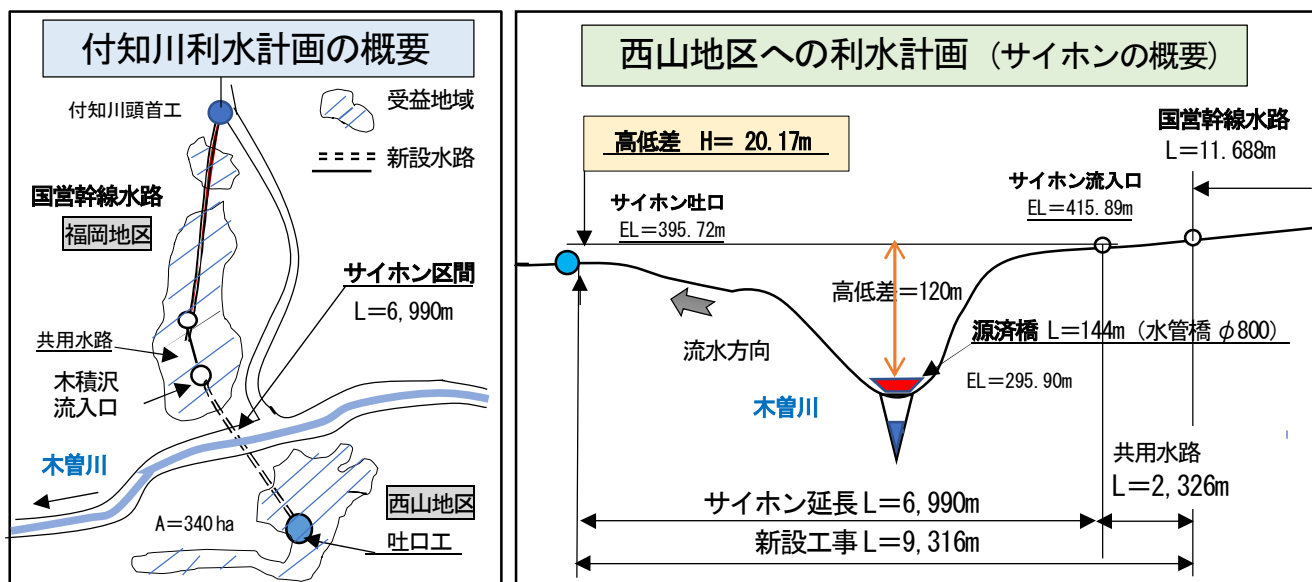
事業も完成して40年が経過、農業振興から工業化へと社会の変化で休耕田と住宅が増加しました。近年、JR東海リニア中央新幹線計画による岐阜県駅の建設や、農地整備地域にリニア車両整備工場と関連する工業団地が隣接して計画され、当地域は再び大きな変貌を迎えます。



「源済橋」は橋長 144m、幅員 4.5m、竣工式は昭和45年6月1日 事業費 115,179,000 円



円形分水施設があるサイホンの吐き口場所は公園整備され、「西部開拓碑」が設置されています



14. 西小学校が出来るまで

明治時代に入るまでは「寺子屋」と言う名前で、お寺を使って子ども達に読み書きを教えていました。駒場村では西小学校の隣にある「福昌寺」で、手賀野村では国道19号から100mほど南側にあります「松源寺」で、寺の僧侶が先生の役割をしていました。



《 駒場村の寺子屋で使われた「福昌寺」 》



《 手賀野村の「松源寺」が寺子屋でした 》

明治6年(1873)には、中津川地域の五つの村(中津川村、駒場村、手賀野村、千旦林村、茄子川村)が連合して『興風義校』^{こうふうぎこう}という名前で、中津川の他に4つの支校を設置して開校しました。駒場村には「一番支校」^{いちばんしこう}として『開蒙舎』^{かいもうしゃ}が中村喜代蔵家に置かれ、「二番支校」^{にばんしこう}として手賀野村に『習興舎』^{しゅうこうしゃ}が松源寺にそれぞれ設置されました。

明治17年(1884)小学校令により、恵那郡内に4つの高等尋常小学校^{じんじょう}(中津川、苗木、岩村、明智)が設置されました。その後、中津川高等尋常小学校は、中津川高等尋常小学校^{こまがの}と駒賀野尋常小学校の2校に分けられました。明治30年(1897)に中津川町、駒場村、手賀野村が合併し中津町となり、翌年には、中津川高等尋常小学校^{じんじょう}と駒賀野尋常小学校^{こまがの じんじょう}は、中津川尋常高等小学校に統合されました。明治40年(1907)頃の児童数は男子578人でその内3人が未就学女子462人の内34人が未就学でしたが、この時代では高い就学率^{しゅうがくりつ}でした。

昭和10年(1935)頃、中津尋常小学校は、中津東尋常小学校と中津中尋常小学校に分けられましたが、中津中尋常小学校の児童数が増えたため、昭和13年手賀野地区の分離が計画され、同年9月に1, 2, 3年生の3学級が木の香りも新しい、分教場で学び始めました。

昭和16年(1941)国民学校令により、これまでの尋常小学校から国民学校に名称が変わると同時に、「中津西国民学校」が開校しました。今の西小学校の始まりです。

戦後、「中津町立西小学校」となり、今の「中津川市立西小学校」となるまで名称は、2回変わ

りました。昭和23年(1948)には修学旅行が復活し、それまでは名古屋方面へ日帰りでしたが昭和44年(1969)からは京都、奈良方面に変更され現在の形となりました。昭和26年、中津町と苗木町が合併し中津川町となり、昭和27年(1952)に市制を施行し現在の「中津川市立西小学校」になりました。創立20周年の昭和37年度に新しい校歌が発表され、作詞は岐阜県出身の国語教育者、児童文学作家で「綴り方生活」の編集に携わった今井^{たかじろう}誉次郎先生です。この校歌の1番では「自然の秘密を探りあて、社会の仕組みを見きわめる力」。2番で「人の値打ちをよく活かし、働くことの意義を知る力」。3番で「体を鍛え技をねり、自由の心を育て上げる力」、「西の子」が大人になるため必要な三つの真実を見つけ出す、学びの大切さが込められています。作曲は「原爆許すまじ」を作られた木下航二さんをお願いしました。この大事な校歌は、元気に歌い継がれています。

三、 二、 一、

きずその由から西校はなほ ~~その~~ 働く人 西校になれ ~~その~~ 社会自然西校あつまれ
 真実の 心 の 友 だち 真実 の 友 だち 真実のし の ひ の 友 だち
 を を だち を だち を だち
 さあ見 だてあげ がんばれ あ見 意義 わになれ あ見 あつまれ
 つけ つけ つけ つけ つけ つけ つけ つけ つけ つけ
 きずこうよ わざを ~~わ~~ ねり つく 生 かし わになれよ かがやく 手を あつまれ
 かがやく よく がんばれ 輝く 世界 かがやく つなぎ
 平和 運動 を 勉強 日本 勉強
 を だ を だ を だ

西小学校校歌

木下 今井

航二 誉次郎



西小学校も児童数の増加と木造校舎の老朽化が進み、昭和47年～50年(1975)に鉄筋コンクリート 4階建の新校舎2棟に建て直されました。

平成 3年(1991)には隣接する西幼稚園の建て替えを含め校庭が手狭になることから、南側と西側の隣接する土地関係者の協力を得て造成を行い現在の広いグラウンドになりました。平成に入って耐震補強^{たいしん}工事が完了し、平成27・28年度には校舎の大規模改修工事が行なわれ、とてもきれいな校舎に



《 昭和36年頃木造校舎の前で楽しい運動会 》

なりました。平成29年度の第76回卒業証書授与式で、卒業生は 8,861名になります。

15. 洋画家 あんどうくに え 安藤邦衛

＜郷土洋画壇の黎明期に温かい灯をともした安藤邦衛＞

安藤邦衛(1889～1971年)は明治22年、中津川に生まれました。豪農の生家は、島崎藤村とは縁つづきの旧家で、藤村は当時すでに上京して明治学院に通っていました。安藤邦衛は多治見工業高校の前身である土岐津の陶磁器学校図案科に通学していた頃、藤村が処女詩集の「若菜集」を発表したので、星雲の夢を抱いて発奮させられました。

上京した折には、白馬会の洋画家の絵にひかれ、機関誌光風や美術雑誌の「みづゑ」、なかでも三宅克己の主宰したスケッチ会の月刊スケッチとの出会いがありました。

明治40年(1907)18歳の時海外留学を決意し、親からもらった千円を懐に単身アメリカへ渡りました。留学先は心酔していた新渡戸稲造が学んだパシフィック大学を選び、美術科に入学しました。当時同じ下宿で二人暮らしをしたのが商業学を学んでいて、後に享栄高校きやうえいの創立者となる堀 栄二でした。

パシフィック大学美術科を卒業すると、サンフランシスコにあるカリフォルニア州立大学の美術学校に入学しました。ここでは、三重県出身の平賀亀祐と親交を結びました。フランス在住50年フランス政府から文化勲章を受章した平賀亀祐は奇しくも安藤邦衛と生年と没年が同じで、喜寿祝展を開催した年の春に帰国して旧交を温めています

サンフランシスコの美術学校を卒業すると、今度はニューヨークのアートスチューデント・リーグに入学しました。ここでは同じ年齢の国吉康雄と親交を持ちましたが、同じ頃在学した北川民次とはあまり交渉はありませんでした。

ニューヨークでの生活は専らアルバイトによる以外に途はなく、東洋趣味の家具メーカーのデザインを担当しました。そのデザインが成功し、家具メーカーは膨大な利益を上げ、10年のニューヨーク生活にもようやく花が開きました。そして、アメリカでの15年の生活にピリオドを打つと、貯まったお金を持って大西洋を横断して念願のパリに渡りました。

パリではアカデミー・グラン・シュミエへ毎日通い絵の勉強に明け暮れました。当時パリには多くの日本人画家が遊学していて、坂本繁二郎や藤田嗣治たちに出会いました。中でも特に清水多嘉示たちとは親しくしました。清水多嘉示は長野県出身の彫刻家で、後に日本芸術院会員となり大成しています。彫刻家と親交したことが、同じ彫刻家であったルサナダ妃との出会いとなりました。

ルサナダ妃は、旧帝政ロシアのグルジア王国の皇女で、二人は恋人というより実の兄妹のように、お互いをモデルに制作に励みました。この頃サロン・ドウ・トンヌに油彩画二点が入選しています。また、同じ時期にルサナダ妃が制作した安藤邦衛の胸像がスペインのバルセロナ美術館に収蔵されました。

ルサナダ妃とモダンボーイの婚約で、日本のプリンスと評判が立ちましたが三年にわたる婚約の甘い生活は結婚には進展しませんでした。パリで交際のあった日本人画家たちが帰国して日本で活躍していて、不惑の40歳を迎えようとする中で、このままパリ生活を続けてよいものかと考えるようになりました。故郷からは帰ってくるようにと旅費を送ってくるし、日本へ帰ってもう一度画家としての道をやり直そうと決心しました。プリンセスとその一家には一度帰国して再びパリへ来ると約束したが、妃とは悲しい別離となりました。こうして安藤邦衛38歳、19年にわたる外国生活にピリオドを打ちました。

日本での再出発を決意して帰国すると、最初にパシフィック大学で起居を共にした堀 栄二と再会しました。すでに日本で成功していた堀 栄二は、安藤邦衛の再出発のために労を惜しみませんでした。堀 栄二は、まず自分の教え子との結婚を勧め、媒酌もしました。そして名古屋に新居を構えさせると、今度は個展の開催のために東奔西走しました。会場は完成したばかりの松坂屋で、フランス帰りの洋画家の個展は珍しいものでした。

帰国した年に、東新町角のライオン写真館2階に安藤洋画研究所を開設しました。当時市内には、名古屋美術院ほか5つの研究所がありました。安藤洋画研究所では水田 はぎという可憐なモデルを取り囲んでデッサンをしたので、たちまち話題が広がりました。翌年には、鶴舞公園前の大池町に移転し、安藤洋画自由研究所と呼ばれました。裸婦のモデルを使った全く自由な研究所であったため、多くの画学生が集まってフランス画壇の風潮を肌で味わっていました。

しかし、当時は絵を習うことは特異な行為で、親の反対を受けたり、貧しい生活の中で努力する青年がいたりしました。月謝の払えない青年があっても強要しなかったのが苦労することが多くありました。それでも、金城女学校の教師を続け、作品を売ろうとはしませんでした。安藤邦衛は、当時から師弟という言葉をきらい、生涯先生と呼ばれるのを恥ずかしく思い、教え子とか弟子という言葉を使いませんでした。

アメリカ時代に川島理一郎と、パリ時代に清水多嘉示と親しかった関係で図画創作協会へは出品していましたが、決して中心画家にはなろうとしませんでした。安藤洋画自由研究所に出入り

する青年画家たちが創画会というグループを作ったり、杉本健吉、小池不可止らが丸善で展覧会を開いたりしました。その後、日本が戦争に突入すると戦災に遭い、所蔵作品とともに安藤洋画自由研究所も灰燼と消えてしまいました。

戦後は金城学園で教鞭をとりながら、太平洋美術協会の委員を務めていましたが、日本洋画壇へ華々しく登場することもなく、昭和46年 83歳の生涯を終えました。

しかし、パリから帰国して蒔いた一粒の種は多くの実を結んでいます。安藤洋画自由研究所は、まさしく画家たちの温床となり、名古屋洋画壇に多くの思い出を残しています。1990年ごろに刊行された、岡田徹画集の巻末の年譜には、安藤洋画自由研究所へ 8kmの道のりを徒歩で通ったことや、当時通っていた多くの画家たちの様子が書かれています。



- ・大正14年秋フランスから帰り、翌年郷里の中津で、当時の恵那諸団体事務所二階を会場に、地域の絵画を志す若者を中心にした同人会「ヒマワリ会」で絵画の展覧会を行なった。このことは、絵画に取り組む地域の多くの若者の刺激になった。
- ・中部日本アンデパンダン美術協会を主宰し、毎年公園美術館及び松坂屋にて公募展を開催する。
- ・またこの時期、図画創作協会及び国画会に出品する傍ら、東海美術協会委員、旺玄会員となり、金城学院短大講師となる。
- ・昭和15年、海軍省の嘱託で、南洋群島の写生旅行を行い、地元中津の「十一屋」において写生旅行の風物展覧会を開催する。
- ・昭和18年太平洋戦争のためアンデパンダン美術協会を閉鎖し、昭和20年3月の空襲で安藤洋画研究所は丸焼けとなる。
- ・終戦後、昭和36年に結成された太平洋美術会の会員になり、中部地方の絵画発展のために尽力した。
- ・昭和46年(1971) 4月 1日名古屋市中区新栄一丁目で没し、中津川市の松源寺に葬られた。

(平成 2年発行「恵那地域画人考」可知 収著より)

(追記) ・昭和41年(1966)喜寿祝展で展覧した滞欧時代の作品は、愛知県美術館に収蔵されています。生家のある中津川には、小学校や生家・親戚に作品の一部があります。

お墓は、手賀野の松源寺にあります。

次男、安藤日出彦氏は1981年名古屋市中区新栄に専門学校「フィニッシュデザイナー学院」を創立し、1984年専門学校設置認可に伴い「広告デザイン専門学校」と改称、2010年から娘婿の誠一郎氏が引き継いでいます。

16. 「ぎおんば」と津島神社

津島神社は、駒場地域住民の氏神様であり鎮守の森となっています。神社の祭神は「牛頭ごず天王てんのう」と言い、インドの祇園精舎の守護神で我が国には「厄除けの神」として伝わり、京都の祇園社(八坂神社)の祭神となっており、牛頭天王は「素す蓋さ鳴のお命のみこと」としてこの世に姿を現されたとされています。この地に津島神社が祀られた起源は定かではありませんが、記録から400年ほど前にさかのぼり、総本社は愛知県津島市にあります。

神社が創設されて以来、駒場地域の氏神様として慈いつくしまれ住民総意により脈々と守り受け継がれてきました。神社と駒場地区の歴史の中には戦後、第一中学校建設当時に駒場区民が負担困窮する中で、「津島神社境内の樹木400本程を拠出し建設資金に充てた」とあり、駒場地域と神社が結びついていました。

現在、12自治会で年次担当を定め、駒場地域の氏神様として津島神社の行事等の遂行を行って、守り続けております。

津島神社の主な年間行事	
氏子総代会総会	4月 下旬
例大祭 ・ ぎおんば	8月 14・15日
新生児祈願祭	8月 15日
七五三祈願祭	11月 中旬
新穀感謝祭	11月 23日
除 夜 祭	12月 31日
元 旦 祭	1月 1日
おみと御開扉祭	3月 20日



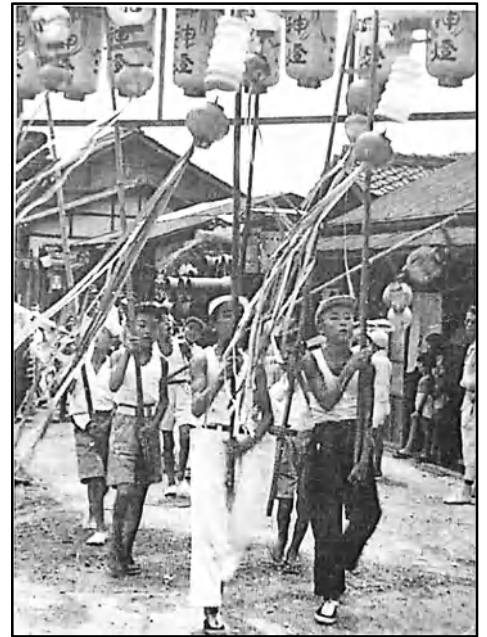
《 津島神社の「本 殿」 》

〈 「ぎおんば」はいつから始まったの? 〉

駒場・手賀野・中津川地域では、8月14・15日に子供たちが参加する「ぎおんば(わいしょ)」の提灯行列が行われています。行列の先頭は「〇〇区」と標示した提灯、続いて中学生や小学生高学年が「高張提灯」を持って「わいしょ！」と声をかけ、続いて「太鼓」を「デデンコ・デンデン」と叩き、その後を小学生低学年の掲げる「弓張提灯」が「わいしょ！」と声をあげて続き、夜になると提灯にロウソクの火を入れます。近年、「みこしまつり」が始まってから笛を吹いたり「わっしょ わっしょ 〇〇区」などと掛声が変わりましたが、「ぎおんば」では前述のやり方が基本です。

この「ぎおんば」の起源は、江戸時代の中ごろから、京の都に疫病や天災が続き、それを鎮めるために始められた祇園祭にならい、中津町の人達を中心に盛大に行われていました。

明治 5年(1872)12月、これまで使われてきた「太陰暦」(月の満ち欠け)から政府は「太陽暦」(現在の暦)を導入しました。この間、「ぎおんば」は明治43年(1910)までは「大陰暦」を元にした 6月15日に、小学校三年生から高等科の男子のみで行われていました。その後、駒場地区の青年達が地域の代表、津島神社氏子総代と相談し「太陽暦」の7月21日と決め、大正時代も継続しました。



《 戦後の「ぎおんば」提灯行列 》

戦後、昭和22年(1947)になると青年団の人達から「お蚕さんの一番忙しい時期で梅雨時であり、子どもが学校を休まなくてはならない」と関係者に相談し、昭和23年から今の 8月14・15日に小学校三年生から中学校三年生までの男子が参加して行われることになりました。女子は津島神社の境内で、盆踊りをしました。「ぎおんば」の提灯行列は別名「けんか」まつりと呼ばれ、「連」がすれ違う時に高学年の竹竿で相手を叩きあうこともあったそうです。

昭和28年(1903)からは、手賀野地区においても行われるようになりました。昭和40年代になると、子どもの数が少なくなってきたので小学校一年生から参加するようになり、その後、女子も参加するようになりました。



《 夏休み中「西の子」達の楽しいお祭りです 》

この「ぎおんば」では中学三年生の代表が「大将」になり、仲間といっしょに責任をもって「連」をまとめ、中学生が小さい子の面倒を見ています。

平成 8年(1996)から、8月14日の夕方に「ふるさとにぎわい広場」に地域の「ぎおんば」連が集合し、津島神社の『御神火』を受け取り提灯に点火して市街地を練り歩く、「ぎおんばジャンボリー」が始まり今年で22回を迎えます。各「連」の提灯が街中に幻想的な雰囲気^{かも}を醸し出しています。

17. 西地域の工場（三菱電機）

昭和17年(1942)、新しく置かれる地方事務所が大井町に決定したことは、郡役所所在地であった中津町にとって不満でした。

時の中津町長 間 孔太郎は、三菱電機常務取締役であった間 四郎と連絡を取りながら「三菱電機名古屋製作所が積算電力計を大量生産するための疎開分工場を建設する計画している」という情報をキャッチすると、早速三菱電機の誘致に乗り出しました。具体的には町議会で三菱電機の工場誘致が議決された昭和17年7月、花田助役を中心に県や関係先への陳情を始めました。一方、間 孔太郎町長は名古屋製作所の本間亀吉所長や姻戚関係にあった間 四郎常務にも熱心な働きかけを行いました。

その結果、昭和17年11月には三菱側が中津町へ視察に訪れることが決定しました。視察に訪れた三菱電機側との折衝の結果、今の中辺り、スポーツセンターの辺り、現在地の三か所が候補地として挙げられましたが実地踏査の結果、最終的にはすぐに使える建物があったことと、今後拡張の余地があったことから現在の地に決まりました。だが、ここには現に稼働中の県の養蚕取締所中津川支所があったので、町当局はこの取締所を別の場所に移築し、その建物を県から払い下げてもらい、三菱電機に譲渡し、中津川工場の建設が決定しました。

周辺の水田を売却した人の座敷の机の上には、百円札が15cmの高さがあったなどという話も残っています。

昭和17年11月に地鎮祭が執り行われ、中津町役場の一室に「三菱電機中津川工場建設事務所」が設けられました。そして昭和18年(1943)の2月11日に工場は完成し、第二次世界大戦のさなか操業を始めました。

三菱電機中津川製作所は戦争という時代背景を抜きにしては語ることが出来ません。操業したての



《 操業当初の木造建物の工場 》

工場は従業員56人という少人数の工場で、航空機用音響連絡機の組み立て作業や戦闘機の機関銃の弾倉覆作業のほか電熱航空服や手袋などの軍需品を作っていました。従業員の

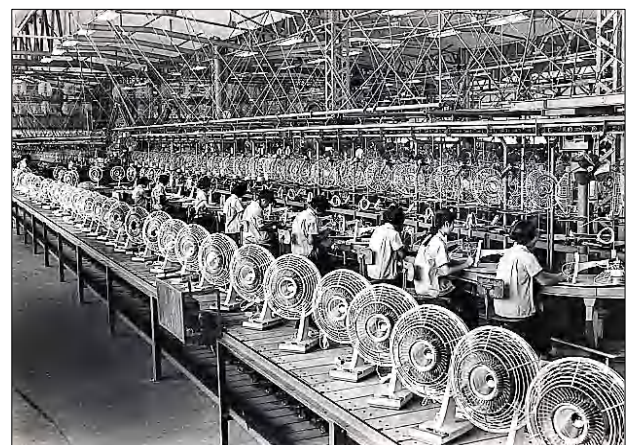
採用は男子は16歳から45歳まで、女子は25歳以上となっていました。

昭和19年(1944)になって戦局が次第に悪化する中、3月には第二工場、7月には第一工場が竣工し、昭和20年(1945)には第三工場が竣工しました。だが工場は出来ても働き手がいなかったもので中津高等女学校、中津商業学校、大津高等女学校の学生らが動員(学徒動員)されることになり、当時従業員は学生を含めて2,000人余となりました。だが戦局のますますの悪化に伴って中津地区も要注意地区となったため、航空服部門は木曽福島島野女学校へ移転し、落合国民学校や恵那中学校も疎開工場に指定されました。当時落合国民学校へは名古屋第三高等女学校瀬戸が挺身隊として疎開し、電装品の組み立て作業にあたりました。

そして昭和20年(1945)8月戦争が終わると2,000人いた従業員が一気に半数の946人に減ってしまい、人々の間には「これでは工場が閉鎖されるのではないか」という不安が広がりました。でも「なんとか地元中津川で働きたい」という働く人たちの熱意により中津川工場の存続が決まりました。

戦後の中津川製作所では扇風機専門工場として名を馳せましたが、今では扇風機は海外生産となり培った送風技術を駆使し、世界7カ国で基本特許を取得した熱交換型換気扇「ロスナイ」、ハンドドライヤー「ジェットタオル」、業務用産業用換気送風機等の製品で“風の中津川”と呼ばれ、蓄積した技術により温水式床暖房、太陽光発電システムを含めて「風・空気・水・光」をベースに、中津川製作所で技術開発をした幾多の製品を生み出しています。

こうした製品に必要な部品の多くは中津川市内にある協力工場で作られ、ここに集められ製品に組み立てられています。中津川製作所の従業員数は1,200人ほどで、協力工場の従業員を含めると多くの人たちの働く場所になっています。



《 中津川製作所で製造していた扇風機の組み立て 》



《 中津川の対岸から見る中津川製作所 》

18. 星ヶ見公園

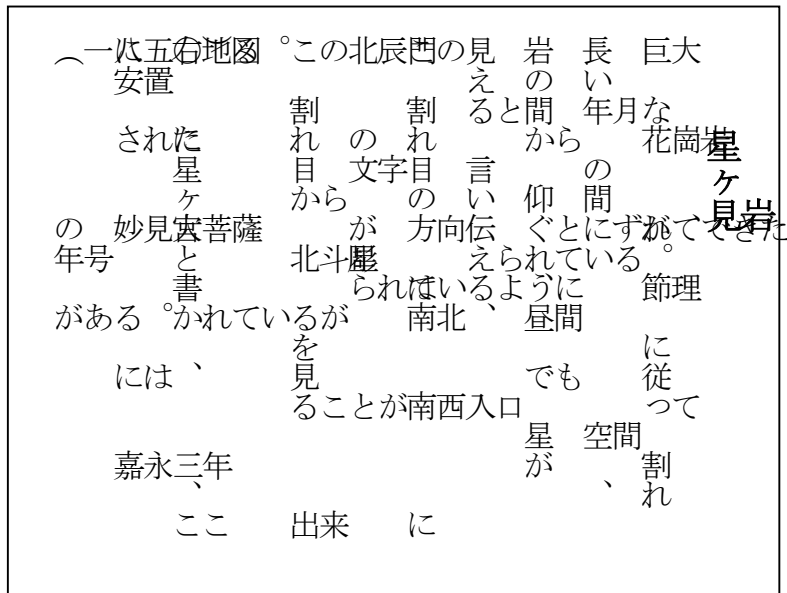
駒場西山地区に位置する星ヶ見公園の付近は、明治時代には駒場村区有財産で薪炭用地（入会地）として大切にされてきました。隣接する農業用ため池であるひょうたん池と神谷池（大正6年完成）のほとりに広がる風光明媚な場所で、小高



《 ひょうたん池から望む 星ヶ見岩 》

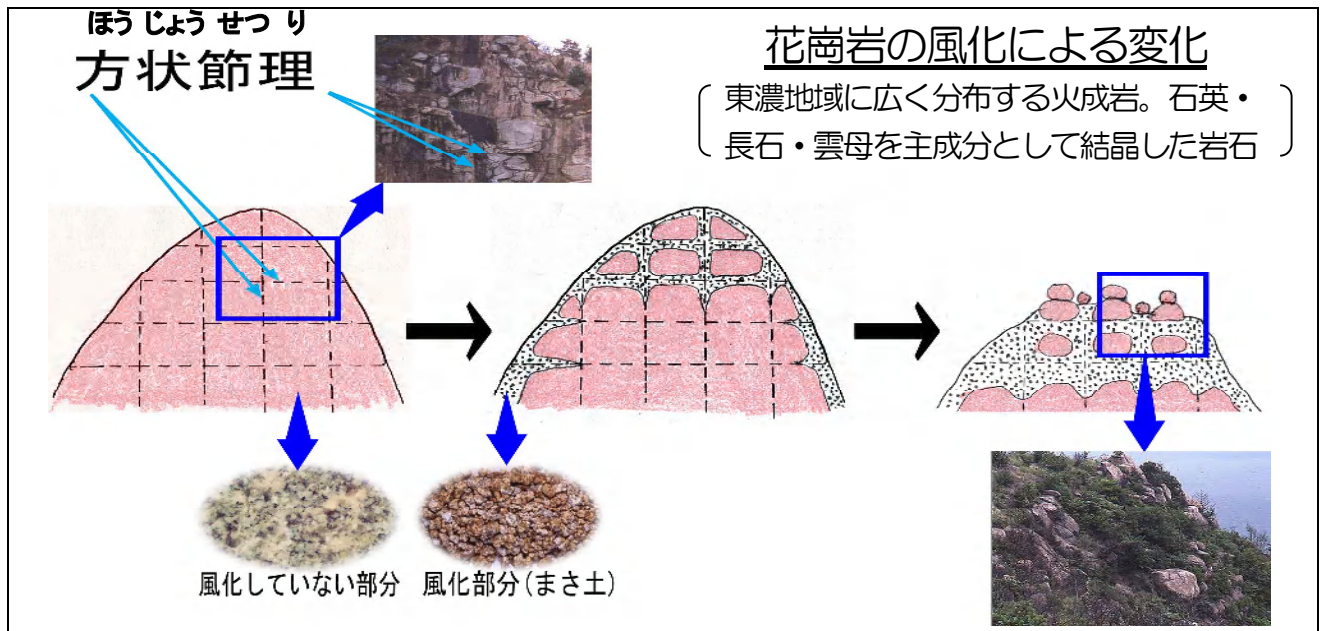
い丘のいたる所に花崗岩の巨岩や、お化け傘岩や舟岩などの奇岩が見られます。この巨岩の中でも、公園名の由来になっている星ヶ見岩は歴史があり昔から地域で大切にされています。この岩は、高さ・幅ともに 約20mもある巨大な花崗岩の割れ目(方状節理)が長い年月で開いて出来たもので、岩の割れ目の下には8畳ほどの石室になっており、入口には下記の看板が設置されています。

この場所は、「星ヶ見荘」に展示される江戸時代の地図に「星ヶ宮」と書かれています。



《 星ヶ見岩から北斗星の方向を望む 》

昭和4年(1929)に中津、手賀野、駒場地区財産区の合併が進められたが、この付近の花崗岩の石山は駒場産業振興財団法人として残され石の切り出し等の事業を行っており、昭和26年(1951)には振興財団を解散して事業は中津川市に移管されました。その後、昭和38年(1963)に鈴木石材加工工場が建設されて石の切り出し販売を行っています。



昭和48年(1973)4月 景勝地である星ヶ見地域一帯の自然環境を保全し、市民の憩いの場として活用されるため、駒場地区代表者が発起人となって「星ヶ見公園開発協会」が設立されています。これは駒場村の土地であったこの地域を保全・管理運営することを目的として、継続して駒場各区協力して整備を行っています。

その後、昭和58年(1983)2月に中津川市において都市公園である「風致公園」として面積15.1haが位置付けられました。風致公園は、良好な自然環境を形成する土地



《 星ヶ見公園「駐車場」の案内板 》

を選定し配置されたものを言います。

近くには岩屋観音堂・源齋公園や西山「開拓碑」などを含め、四季折々の移ろいが楽しめる、中津川ウォーキング星ヶ見岩コースにもなっています。公園の中には 星ヶ見岩のほか に奇岩類や、周辺にはシデコブシの 群生地やコナラ・クヌギ林、そして

湿地の植物には貴重な個体もある可能性を秘めています。星ヶ見公園は、保育園や幼稚園、小学校での遠足や家族とのハイキングなど、子供のころの楽しい思い出の場所であるとともに、市民に愛され親しまれる公園となっています。

19. 中津川で最初の「上宿水道」

駒場の上宿地域は昔から水が乏しいところで農業用水にも困っていて、水田は三反程しかなかったと言われていました。明治33年(1900) 4月、念願の用水が手賀野から引かれ、農地の開墾も進んだことから現在のような水田が拓^{ひら}かれました。しかし、農業用水は確保できましたが相変わらず飲料水には不自由をしており、数少ない井戸水をみんなで利用をしていました。

この状態を憂っていた吉村磯太郎氏は水道を引くことを思い立ち、まず水源を求めていたところある雪の日、近くで早く雪が融けている箇所から出ている清水を発見しました。

それ以後、吉村氏は精力的に上宿に水道を作るために八方奔走^{ほんそう}した結果、当時の間孔太郎町長の協力を取付け、県庁へ一升びん二本の水を送って水質検査を依頼したところ、飲料水に適すると判定されたことから、いよいよ水道の実現を目指して次のような方策に取り組みました。

1. 水源地の土地を米二斗の年貢で借りる。
2. 水源地から道路までの管路工事費、三百円を駒場の公営事業費から拠出してもらう。
3. 各戸へ配管する工事費を信用組合からの借入れするため、関係者で組合を設立する。
4. 各戸から米を二斗ずつ集め、売った代金を経費に充てる。

この内容の詳細は、水源地(手賀野字会所沢446番地44)の横井戸より湧出する上水使用権並びにこれに関連する構造物使用の補償として、地主市川元次郎氏に毎年玄米二斗を支払う契約を結びました。工事費用の約1,000円は駒場公営事業費から300円と、余裕がない中で各戸から米二斗を拠出し計10俵(216円)の資金を作り、さらに信用組合より不足分の借入れと管理を行うため「上宿飲料水使用組合」を20戸で組織し、組合長に吉村 磯太郎、理事に吉村 釵^{けんじろう}次郎、岩井勘太郎、後藤才次郎、長瀬角吉、桃井菊次郎を選出し、工事に着手しました。



水源地には貯水槽を設置し、横に「水神様」が祀られ、裏側に昭和12年4月と刻まれている

この様な苦勞に苦勞を重ね、昭和11年(1936)2月11日に間孔太郎町長、辻麗次助役立会いのもとで起工式を行ない、工事は各戸からの勞力奉仕によって進められ、11月5日に完成しました。しかし、水道の通水をはじめると各戸の支線にセメントパイプを使用していたため水圧で破れあちこちから水が噴き出してしまいました。この失敗により組合を脱退した人もあったが、残り16軒は力を合わせて再度、各戸で二斗一升の米を出して資金をつくり翌12年春、その頃はまだ東京に一社しかなかったエタニットパイプの工場に注文して取り寄せ、セメントパイプを交換しました。

また、「こでの木坂」近くの平井宅あたりには、高圧に耐えるようにと鉄管を使用しています。

こうした経過をたどって、住民が待ち望んだ中津川で最初の簡易水道である「上宿水道」のすべてが完成し、祝うことができたのは着工から2年余り後の昭和13年(1938)4月でした。その後住民の水汲みの労苦はなくなり、飲料水が不足することもなく水道は利用され続け、水道料金は月に8トソ200円、メーター使用料30円の最低料金で使えたのは「上宿水道」だけでした。

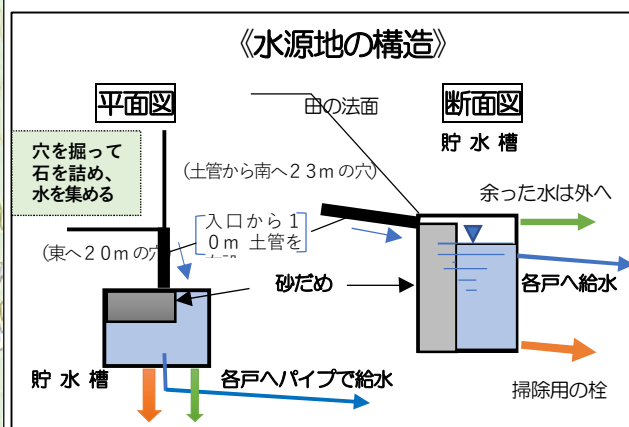
こうして30年間を経過した昭和42年頃には、上宿地域も住宅が増えてきたことから市によって上水道が引かれ、長年に亘って利用されてきた「上宿水道」も次第に上水道に切り替えられてきました。このような時代の変化によって、昭和56年5月に水源地の土地所有権も移り、その後

『上宿水道』の配管と利用区域



「上宿飲料水使用組合」も解散しました。

水道の水源地では現在も水が湧き出ており、土地の所有者が利用されています。



《参 考》

昭和10年頃の1円の価値は一概に確定することは出来ませんが、およそ1円=2～3,000円になります。当時の工事費用1,000円は、現在の換算で200万円から300万円と思われます。